

弥彦よぎ彦 神の麓かみもとに 今日けふらもか 鹿の伏ふすらむ

皮かわ服ふく着きて 角かどつきながら

作者未詳(巻十六・三八八四)

このような仏足石歌の特徴は、今回取り上げた歌でも同様に確認できます。第5句「皮かわ着きて」と第6句「角かどつきながら」は共に鹿の姿を描写しており、

この歌は「越中国の歌四首」のうちの1首として『万葉集』に収められています。内容は、同国蒲原郡の弥彦山にいます神に仕える鹿の姿かたちを讚美すること、その神の尊さを歌ったものです。

の作ということになります。弥彦山を神体山として祀る彌彦神社は現在も新潟県西蒲原郡弥彦村に鎮座し、越後国一宮として信仰を集めています。

ところでこの歌は、

5・7・5・7・7の5句

からなる短歌の末尾に、7音の1句を追加

した形式です。これは

後国へと移管されており、この歌はそれ以前

「仏足石歌体」という歌

やまと
万葉がたり

体で、『万葉集』ではこの歌が唯一です。奈良・

西ノ京の薬師寺に現存する奈良時代の仏足石

(釈迦の足跡を彫刻して礼拝対象とした石)

の傍らに立てられた石碑にこの歌体の歌21首

が縦書きの万葉仮名で刻まれており、仏足石

歌と呼ばれています。

その第1首「御足跡みあしあと作る 石の響なごきは天

に至り 土さへ揺すれ 父母ちちははが為なほに 諸人もろびとの 為なほには仏足石を讚美

する歌で、第6句の「毛呂比止乃多米爾」は第

1〜5句よりもやや右に寄せて小さい字体で

記され、第5句の内容を少し変化させて繰り返

す形をとります。

この形式は第2〜21首でも同様であることから、仏足石歌体の第6句は短歌体の末尾に

唱和のための1句を付け加えたものとみられます。おそらく、仏足石を礼拝する人々がこ

うした歌を声に出して讚唱したのでしょう。

(泉立万葉文化館主任 研究員・竹内亮)

【訳】弥彦の神山の麓に、今日も鹿が伏している

だろうか。皮の衣を着て、角をつけた姿で。